# 同志社大学 2011年度 卒業論文

論題:「思春期の頃の親子関係」と「現在の親子関係」が大学生の「なりたい親のイメージ」に及ぼす影響について

社会学部社会学科

学籍番号: 19081021 氏 名: 今堀 瑞季 指導教員: 立木 茂雄

(本文の総字数:26052字)

ID:19081021

今堀 瑞季 「思春期の頃の親子関係」と「現在の親子関係」が大学生の「なりた い親のイメージ」に及ぼす影響について

[キーワード] 親子関係 なりたい親 家族社会学

本研究は2011年の同志社大学在籍生275名に対して、「思春期の頃の母親・父親との関係の認識」、「将来自分がなりたい親のイメージ」、「家族の普段の生活について」の質問紙調査を実施した。この調査は〈思春期の頃の親子関係〉と〈現在の親子関係〉は、大学生の自分がなりたい親のイメージにどのような影響を及ぼすのか、という論題を明らかにすることを目的としている。

重回帰分析の結果、思春期の親子関係は、なりたい親の理想像に影響している部分が見られた。しかし、今回社会学的な調査を実施するにあたって、桜井・本多の質問紙の尺度は有意確率が低かった。また、現在の親子関係と将来なりたい親の関係は、家族間の関係のつながりがベッタリであるほど、子どもを溺愛したいと考える傾向が認められたが、それ以外の有意な関係は認められなかった。大学生の時点での家族関係は、思春期から現時点までに身につけた価値観で、大人になればなるほど良好な関係にもっていく意志をもつことができる。しかし、〈なりたい親〉は自分の欲望であるため、やはり思春期の頃の親子関係の方が影響を及ぼしている可能性が高い、といえる。

# 目次

はじぬ	かに1
1 家	・同族団研究の流れ1
1.1	『商家同族団の研究』について1
1.2	「京都『老舗』研究――その予備的考察」について2
1.3	「京都の家業と別家――工芸業の場合」について2
1.4	「職人の家」について3
1.5	「家の変動ノート」について6
2 能	
2.1	能の歴史9
2.2	現代の能9
2.3	〈座〉、〈流儀〉、〈家〉9
2.4	シテ方観世流11
3 調	查概要12
3.1	調査概要12
3.2	調査対象12
3.3	A家の概要13
4 調	査結果および分析14
4.1	家業労働の特徴14
4.2	家の継承15
4.3	通婚関係15
4.4	家業経営15
4.5	同族団16
4.6	同族団内の事業連関16
5 考	察17
おわり	) に
注釈	

注釈

参考文献

# はじめに

「『なりたい親』におよぼす思春期の親子関係の影響」で櫻井登世子・本多潤子 (2004) が示す要旨は、以下の通りである。「少子化高齢化社会をむかえ、父親、母親の役割に対する認識も一昔前と様変わりしている。若者たちは将来自分が親になるとしたら、どんな父親、母親になりたいと思うのであろうか。本研究では、親子関係の葛藤がピークに達する思春期のころ、自分の親をどのように認識していたかということが、『なりたい親』におよぼす影響について検討した。思春期のころの親子関係を振り返り、自分の親と同じように子どもと関わりたいと思うかもしれないし、自分の親は反面教師となり、自分の親のようには子どもと関わりたくないと思うかもしれない」 (2004:65)。

さらに、櫻井・本多(2004)は「質問紙によって得られた回答を分析した結果、『なりたい親』は自分の親を基準とした親であり、子どもにとって親は『親のモデル』になっていることが示唆された」という結論を出している。しかし、思春期の親との関係だけが大きく影響しているとは言い切れない。思春期の葛藤を乗り越え、より世界が広がった大学生の視点から感じる取ることは、より多くあると考えられる。

思春期は小学生に比べて、社会から少しずつ〈大人としての行動〉が要求される。JR東日本旅客鉄道株式会社は、おとなは12歳(小学生は〈こども〉)、こどもは6歳~12歳未満(6歳でも小学校入学前は〈幼児〉)と料金を定義している。しかし一方で、映画館では一般(大人)は1800円、学生(大高生)は1500円、小中学生は1000円というように〈小中学生〉の枠組みを設けているところもある。

また大辞泉では、おとな【大・人】の定義を『1 成長して一人前になった人。一人前の年齢に達した人。「入場料一二○○円、子供一○○円」⇔子供。一人前の人間として、思慮分別があり、社会的な責任を負えること。また、その人。「一としての自覚」「青臭いことを言ってないでもっと一になれ」』(デジタル大辞泉 2011)としている。

以上の例から、思春期にあたる中学  $2\sim3$  年(14、5 歳)は、社会的にも大人としての位置づけが曖昧であるといえる。つまり、この頃の彼らは社会から大人を意識させられるが、おとなには至らないこどもとおとなの間の不安定な時期を生きる。そこで、自分もおとなにならなくてはならない、おとなになりたい、という自覚や憧れが芽生え、モデルとなる人間を無意識のうちに探すと思われる。思春期まではルールやそのほかにさまざまなことを教える〈親〉がモデルであるため、与えられたものをそのまま受け取っている。しかし、〈おとな〉のモデルとして親を意識し始めるのは、この思春期の時期だと考えられる。ゆえに、大人を意識する際に与える一番身近な大人である〈親〉の影響も大きいはずだと考えられる。

櫻井・本多(2004)も思春期は自分が将来理想とする親はどんな親であるか、ということを考え始める時期であると指摘している。彼女達は「思春期のころ権威的な親に対して『自分を支配している』と感じ、親に反抗的であった子どもは、自分が親になったとき子どもに対して権威的に接するのは止めよう、と思うかもしれない。反対に、権威的な親の振る舞いを『自分を守ってくれている』と感じていれば、将来自分も子どもに対して権威的になるかもしれない。このように、思春期のころ、自分の親をどのように認識していたか、ということが『理想の親』、『なりたい親』に影響を及ぼすと思われる」(2004:67)と述べている。

しかし、中学生の活動範囲や行動範囲は成人と比べても小さく、経済的な自立も難しい。 ゆえに、親の影響力も大きいのも確かだが、高校・大学と年を重ねるにつれて環境が変わ り、周りから受ける影響が思春期に比べて大きくなると、考え方にも影響が出るのではな いか、と考えられる。

特に〈大学生〉として自分で考え行動する環境に立った時、〈思春期〉のときには分からなかった親の偉大さ、愛情を理解する可能性は高い。たとえば、アルバイトをすることによって、自分が親からもらっていたお金がどれほどの努力で得られていたものであるか、自分にどれだけのお金がかけられていたのかを身をもって理解するかもしれない。また、下宿をすることによって生活するということがどれだけ大変なことかを考えるだろう。

このことから、〈思春期に抱いていた親に対する感情〉と〈現在の親に対する感情〉は成長の過程でなんらかの変化があると考えられる。それならば、〈理想の親のイメージ〉は〈現在の親との関係〉からも影響がみられるのではないか。

よって、〈思春期の頃の親子関係〉と〈大学生が抱く理想の親のイメージ〉の関係を考えるだけではなく、〈現在の親子関係〉と〈大学生が抱く理想の親のイメージ〉の関係も同時に分析するべきである。以上の問題意識から、本稿では「〈思春期の頃の親子関係〉と〈現在の親子関係〉は、大学生の自分がなりたい親のイメージにどのような影響を及ぼすのか」をテーマに研究を進めていく。

本稿の構成は以下の通りである。まず、1 章では先行研究に基づき、思春期の親子関係となりたい親のイメージについてと、現在の親子関係となりたい親のイメージについて整理する。その後、2 章で分析枠組みを説明した後、3 章ではSPSSを用いて分析をおこなう。最後に、分析結果をふまえ、結論と今後の課題を述べる。

#### 1. 先行研究

#### 1.1 家族社会学とは

#### (1) 家族社会学の定義

家族社会学という分野とは、どのようなものなのだろうか。

『新社会学辞典』(D.ミッチェル 1987)によると、〈family(家族)〉という用語は、社会学者たちは、家族が社会組織の基本的単位であると確信しているが、社会学者の語彙のなかでも、最もあいまいに定義されているものの1つである。バージェス(E.W.Burgess)とロック(H.J.Locke)は、家族とは、婚姻、血縁、ないしは養子縁組の絆によって結合した人々の集団であり、単一の世帯(household)を構成し、夫と妻、母と父、兄弟と姉妹といった、それぞれの社会的役割を担って、お互いに相互作用をしたり、相互にコミュニケーションしたりする集団であり、共通の文化を生み出す集団であると定義している(D.ミッチェル 1987)。

家族社会学という分野は、社会学の中で家族は最も古くから研究されてきた対象領域の 1つだと山田 (2010) は言う。家族は今も昔も多様であったというのが、近年の家族社会 学の定番言説である。しかし、多様性を指摘するだけでは不十分で、多様性の中に潜む統 一性、そして多様性を保ちつつ変動する方向性を明らかにすることが家族社会学の任務だ としている。 また、目黒依子(2007)は、家族を対象とする社会学的研究の領域は一般に〈家族社会学〉と称されている、としている。目黒(2007)は「家族を対象とする研究は、家族がもつ多様な側面への接近がさまざまな研究領域から行われており、社会学的接近はその一つである。また、社会学的接近における視点や方法も一様でない。」(i)と述べている。

# (2) 家族の変容

家族は生き物であるため、時代の変化と共にその形態も変わっていく。2011年1月に発行された『現代用語の基礎知識』の中で山田昌弘は、日本家族を特徴づける現象として、〈ペットの家族化〉と〈児童虐待〉を挙げている。ペットの家族化とは、犬や猫などのペットを家族とみなす人々が増えていることである。児童虐待は、特に親による子どもへの暴力、養育放棄などを含み、ときには死に至らしめることもある。前者は、〈本来家族でない動物を家族であるかのように扱う〉現象であり、後者は〈本来家族である子を家族でないかのように扱う〉現象である。この現象は、〈家族が本来なら選択不可能で、解消が困難な関係性として認識されてきたが、一方的に家族にしたり、解消したりできるようになった時、これを家族と呼べるのか〉という疑問を抱かせる(山田 2011)。つまり、現代の日本の家族形態は大きく変容を遂げており、それに伴って〈家族〉問題は日々変化している。そのため、常に新しい調査を実施し、分析していく必要がある。

以下は、大きな概念での家族社会学における〈親子関係〉の分野から、社会心理学の視点から捉えた〈親子関係〉と、家族社会学の中でも家族間の健康度をはかることによって捉えることのできる〈親子関係〉を考える。

#### 1.2 2 つの視点からのアプローチ

# 1.2.1 思春期の親子関係の影響――社会心理学

#### (1) 受容と要求性(統制)

『新社会学辞典』(D.ミッチェル 1987) によると、社会心理学 (social psychology) とは、個々人の相互作用と、社会的環境と個人との関係を研究する学問である。

本研究のきっかけとなった「『なりたい親』におよぼす思春期の親子関係の影響」(櫻井・本多 2004) は、社会心理学の領域であるため、社会心理学の要素を多く含んでいる。

『社会心理学事典』(日本社会心理学会 2009)の「親子関係」では、「これまでの研究を概観すると、親の養育スタイルは、『受容』と『要求性(統制)』といった2次元から構成されると考えられている(Baumrind, 1991;平石, 2006; Maccoby & Martin, 1983; Steinberg et al, 1992 など)。『受容』は、愛情表現をしたり、子どもの要求に対し応答的であるなど、子どもに対して受容的、支持的に接する態度を、『要求性』は子どもの行動を統制しようとする態度をさしている。これらの高低により、養育態度のスタイルとして、『権威ある』『権威主義的』『甘やかし』『放任』の4タイプが表される」(206)という定義をまとめている。

〈受容〉と〈要求性〉について、大橋正夫・長田雅喜(1987)は、〈受容〉と〈統制〉と示し、多くの人間にとって家庭はホームベースとして機能し、そこでの親の愛情や配慮は、子どもの自立を支える力となろうとしている。そして、従来多くの相関的研究が、親

による受容は、それが一貫性の欠如や不安をともなわないかぎり、子どもの望ましい諸特徴 (その中には、積極性、自立性などが含まれていることが多い)と結びついていることを示してきたのも肯ける結果である。親による統制は、社会化された、いわゆる〈よい子〉であるが、自発性・創造性・社交性などには欠けがちの子どもであることと結びつきやすいことを見出している。ただし、統制された子どもは、自発性に欠けるとしても、自立性に欠けるとはいえないようである。

さらに大橋・長田(1987)は、そこで、自立を考える場合に重要な親子関係の側面とし て、不安・緊張―穏やか・リラックスの次元が現れるとしている。不安・緊張が高いと、 親は外的状況や内的状況の変化の影響を受けやすくなり、結果として一貫性を欠いた態 度・行動を取りがちになる。親による統制にしても、不安・緊張をともなった過保護・過 干渉の色彩を帯びると、子どもの自立を困難にしやすい。世界を安定性のない危険なもの だとみなす親にとって、わが子が自分から離れて行動することは強い緊張をもたらす。不 安に駆られた親は、子どもをじっと見守ることができず、自分の影響下に子どもを置こう とする。一方、子どもの立場からすると、自分が何か新しいことを試みようとしたり、親 の影響が直接及ばない場へ出かけようとしたときは、情緒的な緊張の高まった親が、不安 を掻き立てるような言動で、自分を阻止するということを繰り返し経験するようになる。 それは子どもを束縛からくる不満に落としいれると共に、自立の努力と親の情緒的反応と の連合を学習させることになる。そのような親の反応を予期して子ども自身がその状況で 不安を感じるようになると、自立や親からの分離が抑制されるようになる。一般的に言っ て、親の不安・緊張が低いのは、子どもの情緒安定性などと結びつく望ましい特徴であろ うが、極度に低いとそれが子どもに対する無関心・放任に結びつくこともある(大橋・長 田 1987)。

また『社会心理学事典』(2009)では、〈受容〉・〈要求性〉のいずれも高い〈権威ある(authoritative)親〉において、子どもの精神的健康や学業成績は高く、問題行動が少ないといった知見が見出されてきたという認識があるとしている。最近では、青年期の子どもに対する親の統制を道徳、慣習、健康管理、パーソナルなどの領域ごとに検討する方向もあり、道徳・慣習・健康管理領域における統制は親の権威が認められやすく葛藤になりにくいが、個人的領域(ヘアスタイル、友人選択など)における過剰な統制は、青年の自立やアイデンティティの確立を脅かし、精神的健康を低める可能性が指摘されている(Smetana&Daddis, 2002 など)という見解もある(日本社会心理学会 2009)。

#### (2) 「『なりたい親』におよぼす思春期の親子関係の影響」

思春期は〈おとな〉と〈こども〉の要素を同時に持っている。この時期について櫻井・本多(2004)は、「親子相互作用により、家族関係は良好なものになっていくが、子どもが思春期にさしかかると、第二次反抗期が始まり、親子間の葛藤が多くなる。親の権威が相対的に低下し、子どもは親の言うことすべては受け入れなくなる」(66)と言う。「思春期は親への愛着と自律性に揺れる時期である。子どもの『自律した個体でありたい』という気持ちと『親と心理的につながっていたい』という気持ち、親の『自律を支援してあげたい』という気持ちと『自分のもとから離れないでいてほしい』という気持ち、というそれぞれアンビバレントな感情のなかで、親子は葛藤を経験する」(67)としている。

「『なりたい親』におよぼす思春期の親子関係の影響」(櫻井・本多 2004)は、思春期のころ、自分の親をどのように認識していたか、ということが理想の親、なりたい親に影響を及ぼすとしている。ここから、思春期のころどのように親を認識していたかを質問紙によって調査し、なりたい親とはどんな親なのかについて検討している。この質問紙の分析の結果は、以下のようにまとめられる。

まず、どのような親になりたいかについての質問紙で、40項目からなる質問について因子分析をしている。その結果、「親の言うことを素直に聞く子どもに育てたい」「子どもから尊敬され、目標にされたい」などの項目から構成されている〈支配〉、「子どもの人格を認めてあげたい」「子どもの心を大切にしたい」などの項目から構成されている〈寛容〉、「仕事も子育ても両立したい」「子どもに不自由ない豊かな生活をさせてあげるためにも共働きをしていきたい」などの項目から構成されている〈放任〉、「自分の時間を削っても子どもにつくしたい」「子どもを包み込んであげたい」などの項目から構成されている〈溺愛〉である。次に、思春期のころの母親との関係に関する認識についての質問紙では、30項目からなる質問について因子分析をした結果、4つの因子が抽出された。この4因子は久保田の結果とほぼ一致しているが、各因子を構成する質問項目は異なっている。「母親がうっとうしくなった」「母親の愛情を素直に受けとめられなかった」などの項目で構成されている〈拒否〉、「母親に支配されていた」「母親の存在がうすくなった」などの項目で構成されている〈侮蔑〉、「母親への感謝の念が起こった」「母親を尊敬するようになった」などの項目から構成されている〈敬愛〉、「母親のいうことを聞いていれば間違いないと思った」「母親以外に相談相手はいなかった」などの項目から構成されている〈依存〉である。

以上の2つの各項目についての結果を得点化し、下位尺度ごとに合計得点を算出し、下位尺度得点とした。各下位尺度および「どのような親になりたいか」について、40項目の合計得点の平均と標準偏差を示している。さらに、「どのような親になりたいか」と「思春期の頃の母親との関係に関する認識」との相関関係を調べるため、「どのような親になりたいか」と「思春期のころの母親との関係に関する認識」の各下位尺度得点の相関関数を示した(櫻井・本多 2004)。

以上から、櫻井・本多(2004) は次のように考察している。まず、「どのような親になりたいか」に及ぼす思春期のころの母親との関係の影響として、まず3つの親のタイプを 提示している。

はじめに、子どもを支配する親である。「どのような親になりたいか」の支配因子は「思春期のころの母親との関係に関する認識」の依存因子と 1%の水準の相関がみられた。このことは、母親に依存し、母親の支配下で行動していれば間違いないと思っていた親子関係が、自分が将来親になったときに、子どもの上位に立ち子どもを支配するような親になりたいと思わせる。次に子どもに寛容な親。「どのような親になりたいか」の寛容因子は「思春期のころの母親との関係に関する認識」の依存因子と 5%水準の負の相関がみられた。このことは、寛容な親になりたいと思う人は、思春期のころ母親に依存していなかったと認識しており、自分の意思で行動し、母親のためではなく、自分のために努力していたと考えられる。したがって、自分も子どもをひとりの人間として尊重することを理想とし、子どもに対して寛容な親になりたいと思わせる。最後に、子どもを放任する親である。「どのような親になりたいかの放任因子は「思春期のころの母親との関係に関する認識」の4因子のいずれとも有意な相関関係は得られなかった。しかし、拒否因子、侮蔑因子と正の

関係傾向、敬愛因子、依存因子と負の関係傾向がみられた。このことから、母親をわずらわしく思ったり、軽蔑したりしていたという認識は、母親への尊敬や感謝を否定し依存もしなくなると考えられる。親になったとしても、母子の結びつきが弱かったために育児に対して関心が持てず、子どもにどのように関わればいいのかわからないため、母子関係は希薄になり、放任的な親になりたいと思わせる。

さらに「どのような親になりたいか」で抽出された因子の関係として、支配因子は寛容 因子と 1%水準の負の相関、溺愛因子と 1%水準の正の相関がみられた。また、寛容因子は溺愛因子と 5%水準の正の相関がみられた。このことは、〈溺愛〉という親のタイプには 2つのタイプがあることを示していると考えられる。 1 つめに、自分の思い通りの子どもになるように子どもを管理し、自分も子どもから理想の親と思われるように行動するタイプ、 2つめに子どもの自主性を尊重しながらも、子どもに安心感を与えられるように行動するタイプである。近年は前者が多く、子どもを支配し溺愛しているように思われる。

以上をふまえて考えると、思春期のころの母親との関係は多かれ少なかれ「なりたい親」 に影響を及ぼしていることが示された。

しかし、自分自身が親にかまってもらった経験がないと、やはり自分も子どもに対して 放任的な親になるだろうという傾向が示されたように、結局「なりたい親」は自分の親と 同じような親ということになる。よって、「思春期のころ、母親との関係をどのように認識 していたかということが、自分が将来「なりたい親」に影響を及ぼし、自分の母親をモデ ルとして子どもと関わっていくのではないだろうか」、と櫻井・本多(2004)は結論づけ ている。

#### 1.2.2 現在の親子関係の影響――家族社会学

1.1 でも述べたように、家族の変容によってさまざまな問題が現れる。

目黒(2007)は、「家族システムの機能に問題があると、その影響は夫婦関係はもとより親子関係にも及ぶ。離婚や登校拒否、家庭内暴力といった具体的な形になって現れる結果よりも、潜在的・長期的影響の方が把握しがたいために、影響の内容についての理解も不十分である。子どもの発達は種々の段階を経る長期的な課程であり、子どもの発達環境としての家族がいかに機能するかは、次世代につながる影響をもたらすものである」(133)と述べている。

また、WHO(世界保健機構)は、〈健康〉を身体的・精神的・社会的に完全に良好な状態であり、たんに病気あるいは虚弱でないことではないと定義している。この精神的な安定をもたらす大きな要因として、「良好な家族関係」が挙げられる。つまり、健康な家族関係こそ、人間としての基盤となっていると言える。

### (1) 家族システムの計量的研究における方法論上の前提

そこで、この項では「円環モデル」に関する論文である、立木茂雄による『家族システムの理論的・実証的検証ーオルソンの円環モデル妥当性の検討』(1999) に焦点をあてる。 立木 (1999) は、現在の親子関係を図る尺度として、現在の家族関係を調べる尺度である「円環モデル」という家族システム評価のための基礎概念を用いることとしている。

「ミネソタ大学のディビット・ハーマン・オルソン(Davit Herman Olson)は、家族機能に関する理論的・実証的研究を 40 年以上にわたり精力的に進めた。オルソンのグループは、1979 年 Family Process 誌で家族研究・家族療法に関する包括的なレビューを行い、きずな(cohesion)・かじとり(adaptability)の両次元が家族機能を決定する上で中心的であると主張し、この 2 つの次元を組み合わせて結婚・家族システムの円環モデル(Circumplex Model)を発表(Olson, Sprenkle & Russell, 1979; Tatsuki, 1985)」(立木 1999)している。

立木(1999)は、オルソンらの先行研究に触発され、独自の尺度を用いながら円環モデルの妥当性を検討してきた流れをまとめている。この「円環モデルの構成概念妥当性」について一貫した方法論を明示する。

まず、家族システムの計量的研究における方法論上の前提をまとめる。これに関しては大きく2つのテーマを設定している。第1のテーマは、家族機能に関する理論モデルの検証(現前に繰り広げられる家族の行動が、理論モデルを想定することによってどの程度よく説明されるのか、ということ)。第2のテーマは、標準的な家族機能評価尺度の開発(この尺度を用いることによって、家族機能を決定する上で重要となる家族システムの特性を客観的に評価できるようにする、ということ)である(立木 1999)。

立木(1999)によると、これら2つのテーマは相互に関連しあっており、標準化された 測定用具を持たない理論モデルは、その実証的実在的を主張する手段を持たない。同時に、 十分に明確な理論枠組みを持たない評価尺度は科学の根本的基盤、すなわち〈現前の家族 がなぜそのような振舞いをするのかを説明する力〉を持っていない。〈説明する力〉こそが 計量家族研究の基盤となるものである。家族機能に関する科学は、理論と実証という2つ のテーマの間の構造的な関係を明確化する試みに他ならない。

しかし一方で、現前の家族が健康であるか病理的であるかといったことの診断・評価のみに関心があるのなら、理論などなくてもかまわないという立場もあり得る。しかし、科学における理論的構造要素の有効性や有用性に対する実証主義からの批判に対してヘンペルが示した考えを用いて、ここではこう考える。科学の第1の目的は予測を行うことではない、むしろ現前の現象に意味を与えて、それを説明する一連の考えや原則を提供することにあるのだ。さらに、家族機能の科学は、目の前の家族が問題を持つのか、持たないのかを予測・判定したいという動機から、進められたのではない。なぜ家族は目の前でそのようなふるまいをするのか。この問いに対する臨床家の過去 40 年にわたる経験則に、合理的な説明を加えたいと試みが蓄積される中から、家族システムの機能に関する理論モデルは生まれた(立木 1999)。

理論モデルを構築する際の、基本的な素材のことを〈構成概念 (construct=これはモノ・人・出来事・考え方が一塊にくくられる時、その共通性を明示するためにつける名札のようなものである)〉と呼ぶ。理論モデルを構築するには、1) その概念が何らかの実証的な指標によって裏付けられているもの(現実を何らかの操作を通じて指標化)、2) 現実の具体的な操作によっては指標化され得ない抽象的な概念(具体的概念を説明し、意味づける機能)、の2種類の素材(構成概念)が必要である。これらを体系的に結びつけることによって、現実を説明し、関係を予測し、さらに現実を統制できる(立木 1999)。

この尺度は、家族がどのような面で健康であり、あるいはどのような面では問題をもっているのかを明確に示すことができ、さらになぜそのようなことがいえるのかを理論的に

説明することもできる。そのようなモデルとその指標を開発する。

『家族システムの理論的・実証的検証ーオルソンの円環モデル妥当性の検討』(立木 1999)では、レビンガー(Loveinger, 1957)にならって、3 段階に分けた構成概念妥当化のためのパラダイム(construct validation paradigm)を採用した。これらの諸段階は、家族システムの機能を測定するための測定用具を3つの主要な観点から検討する。すなわち、1)〈理論的〉(測定用具の理論的な考察には、その尺度が測ろうとする構成概念ややその構成概念が外的な変数とどのような関連性や仮説的な関係を有するのかについて検討する)、2)〈構造的・内的〉(項目と尺度間の相関や反応のバイアスあるいは測定の信頼性について評価を行う)、3)〈外的〉(並存的妥当性、予測的妥当性など、さまざまな妥当性の検証)、という3つの妥当性の観点である(立木 1999)。

#### (2) 円環モデルの概念

では、ここから〈円環モデル〉という家族システム評価のための基礎概念について述べる。円環モデル(Circumplex Model)は、米国における過去 40 年間にわたる家族研究の成果から演繹的に構築された理論仮説である。特徴はきずな(cohesion)、かじとり(Adaptability)、コミュニケーション(Comunication)の 3 つの次元から家族機能の健全度を評価しようとする点であり、これは代表的な統合的家族システムモデルのことである(立木 1999)。

まず〈きずな〉の尺度として、きずなの水準が極度に高い場合を〈ベッタリ〉 (enmeshment)、中庸だがある程度高い場合を〈ピッタリ〉(connected)、中庸だがある 程度低めの場合を〈サラリ〉(separated)、極度に低い場合を〈バラバラ〉(disengagement) としている。次に〈かじとり〉の尺度として、かじとりの水準が極端に高い場合を〈てん やわんや〉(chaotic)、中庸だがある程度高い場合を〈柔軟〉(flexible)、中庸だがやや固 めな場合を〈キッチリ〉(structured)、極端に固い場合を〈融通なし〉(rigid)としてい る。〈きずな〉とは、システムとしての家族の健康・不健康度を〈家族の成員間の心理的・ 社会的な距離〉にもとめる考え方・概念を統一し、名づけたものである。次に〈かじとり〉 とは、状況の変化・成長に応じて夫婦・家族システムを柔軟に変化させる能力である。こ の根底にあるのは、形態維持(morphostasis)と形態変容(morphogenesis)という対概 念だ。システムに逸脱や誤差が生じたとき、その情報に基づいてシステムを再制御するメ カニズムを指す言葉をフィードバックという。これには負と正の2種類がある。負のフィ ードバックは、逸脱や誤差を発見すると、それを極力少なくし、逸脱に対抗してシステム を保守するような(逸脱対抗)制御をする。それが形態維持(保守・維持するとき)であ る。逆に正のフィードバックは、逸脱や誤差を発見すると、それを奨励し、逸脱をより増 幅させるように働く。これが形態変容(変化させるとき)である。つまりかじとりは、状 況に応じて家族内のリーダーシップや役割、しつけ、問題解決のスタイルなどを柔軟に変 化させる能力である。そして、家族システムが環境の変化に柔軟に対応できるためには、 正負両方のフィードバックが状況に応じて適切に切り替えられる必要がある、といえる。 また、この円環モデルのきずな、かじとり、コミュニケーションは、健康な家族機能と家 族介入の目標に重要な概念であり、特にきずな・かじとりは家族がいかにしてストレスに 対処するかを理解する上で、とても重要である(立木 1999)。

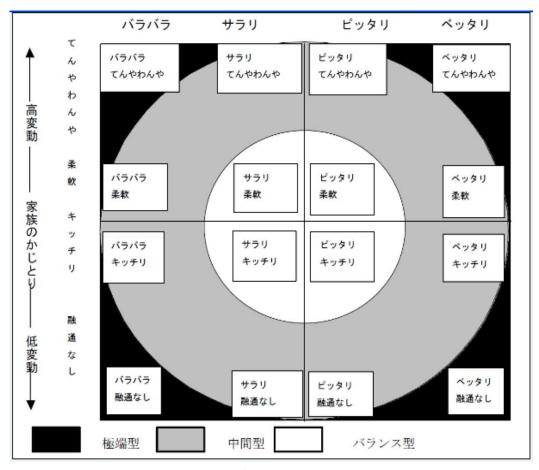


図1:円環モデルによる家族システムの類型

「出典: Olson et al, 1988: 立木, 1999」

# (3) 円環モデル仮説と実証研究

立木(1999)は円環モデル仮説として、1)家族システムと家族機能、2)家族コミュニケーション、3)家族ライフサイクルという三種類の外的変数との関わりについて7つの仮説をたてた。まず、家族システムと家族機能との関係として、1)きずなとかじとりの両次元でバランスのとれた段階に位置する夫婦・家族システム(バランス型)は、極端の段階に位置するシステム(極端型)よりも、家族ライフサイクルの各段階でよりうまく機能する、2)バランス型の家族は極端型の家族よりも多様な行動様式を持ち、変化に対して柔軟に対応できる、3)夫婦・家族の持つ規範が、円環モデルの両次元、あるいはどちらかの次元の極端な段階での行動を支持していれば、家族成員がそれを受け入れる限り家族システムはうまく機能する、4)夫婦・家族システムは、家族成員が報告する現実像と理想像が一致すればするほど機能的になる、ということが挙げら

れる。次に家族システムと家族コミュニケーションとの関係として、5) バランス型の夫婦・家族は極端型の夫婦・家族よりも、より好ましいコミュニケーションの技術をもつ傾向がある、6) 好ましいコミュニケーションの技術を用いる場合、バランス型の家族は、極端型よりも簡単にきずな・かじとりの段階を変化させることができる、ということが挙げられる。最後に、家族システムと家族ライフサイクルとの関係として、7) 家族ライフサイクルの各発達段階で状況的ストレスや変化に対処する際、バランス型の家族はきずな・かじとりを変化させるが、極端型の家族は変化に抵抗し現状を維持しようとする、ということが挙げられる(立木 1999)。

本研究においては、家族システムと家族コミュニケーションとの関係より、「4)夫婦・家族システムは、家族成員が報告する現実像と理想像が一致すればするほど機能的になる」の仮定を使用する。2章のまとめとして、櫻井・本多は、「思春期のころ、母親との関係をどのように認識していたかということが、自分が将来『なりたい親』に影響を及ぼし、自分の母親をモデルとして子どもと関わっていくのではないだろうか」という結論を出し、立木は「夫婦・家族システムは、家族成員が報告する現実像と理想像が一致すればするほど機能的になる」という仮説を立てている。

上記から筆者は、「大学生の〈なりたい親〉のイメージはどうやって成立するのか」というリサーチクエスチョンを立てた。そして、「思春期の親子関係の因子が、なりたい親のタイプの形成に影響を与える」、さらに「現在の親子関係の因子が、なりたい親のタイプの形成に影響を与える」、という仮説を立てる。

#### 2. 研究方法

#### 2.1 調査対象と手続き

櫻井・本多(2004)は神奈川県内の K 女子大学生 116 名に対して質問紙調査を実施している。思春期のころの母親との関係を調べるために、久保田(1995)が作成した「思春期の頃の自分と母親との関係に関する認識を測定する尺度」を修正して使用した。授業中に集団で実施という手続きをとっており、思春期の頃の自分の母親との関係に関する認識を測定する尺度についての質問紙を実施したその1週間後に、同一被験者に対してどのようになりたいかについての質問紙を実施している。

今回の調査では、同志社大学生(院生を含む在学生)を対象として、男女 275 名 (男 134 名、女 136 名、無記名 5 名) に配布し、275 票回収した。手続きとしては、授業中または休み時間などに配布し、その場での回収をするという質問紙調査を実施した。

#### 2.2 調査指標

先行研究で明記した 2 つの文献の変数を基本の軸とおき、尺度には「思春期のころの母親との関係に関する認識についての尺度」(櫻井・本多 2004)、「どのような親になりたいかについての尺度」(櫻井・本多 2004)、「円環モデル」(立木 1999)を使用するとする。また今回は対象が男女であるため、同性の親だけではなく父親・母親との関係も調査している。質問紙は、その 2 つの尺度を取り入れた質問項目とフェイスシートを加えた「『なりたい親』に及ぼす影響~思春期と現在の親子関係より~の調査」という質問紙を配布した。内容は、[1] ①思春期の頃(中学 2~3 年の頃)の母親との関係の認識について、②思春期の頃(中学 2~3 年の頃)の母親との関係の認識について、②即義のイメージ」について、[3] なりたいと思う親のイメージの要因について、[4] 家族の普段の生活について、[5] 対象者自身のことについて、の 5 部構成である。

#### 2.3 分析手法

#### 2.3.1 思春期の親子関係について

思春期の親子関係についての質問は、[1] ①思春期の頃(中学 2~3 年の頃)の母親との関係の認識について、②思春期の頃(中学 2~3 年の頃)の父親との関係の認識について、である。「『なりたい親』におよぼす思春期の親子関係の影響」(櫻井・本多 2004)での分析手法は、思春期のころの母親との関係に関する認識についての質問紙で、30 項目からなる質問について因子分析をした。その結果、「拒否」「侮蔑」「敬愛」「依存」の4つの因子が抽出された。

今回の調査では、「『なりたい親』におよぼす思春期の親子関係の影響」(櫻井・本多2004)で使用されている「『母親との関係に関する認識』の4因子の構成項目と因子負荷量」を参考に、有効と思われる各因子の上位の項目を使用した。回答は〈どちらともいえない(4)〉を含む〈あてはまる〉から〈あてはまらない〉の7段階でそれぞれが評価している。また、私立大学の男女(2011年、京都府)を対象としているため、思春期の頃(中学2~3年の頃)の母親との関係の認識についてだけではなく、思春期の頃(中学2~3年の頃)の父親との関係の認識についても同時に質問した。思春期の頃の父親との関係の認識についての質問項目は、思春期の頃の母親との関係の認識についての項目と同じものを父親に置き換え使用している。各12項目からなる質問で得られた回答を、SPSSを使って因子固定なしで因子分析し、〈母親因子〉〈父親分子〉をそれぞれ抽出した。

#### 2.3.2 将来自分がなりたい親について

将来自分がなりたい親についての質問は、[2]「将来自分がなりたい親のイメージ」について、[3] なりたいと思う親のイメージの要因について、である。「『なりたい親』におよぼす思春期の親子関係の影響」(櫻井・本多 2004)での分析手法は、まずどのような親になりたいかについての質問紙で、40項目からなる質問について因子分析をしている。その結果、「支配」「寛容」「放任」「溺愛」の4つの因子が抽出された。さらに、「どのような親になりたいか」の質問紙で、なりたいと思う親のイメージが形成された要因を自由に記述させている。

今回の調査では、「将来自分がなりたい親のイメージ」についての質問に、同論文の「『どのような親になりたいか』の4因子の構成項目と因子負荷量」を参考にして、各因子の上位3つの項目を使用した。同じように回答は〈どちらともいえない(4)〉を含む〈あては

まる〉から〈あてはまらない〉の7段階でそれぞれが評価している。12項目からなる質問で得られた回答を、SPSSを使って因子固定なしで因子分析し、〈なりたい親因子〉を抽出した。

さらに「なりたいと思う親のイメージの要因について」の質問では、自分が考えるなりたい親のイメージの要因を、回答者に自由に記述してもらった。櫻井・本多の質問では「自分の育った環境、マスメディアの影響」を回答の例として記述していたが、回答への影響を考慮し、例の記述は省略した。

# 2.3.3 現在の親子関係について

[4] 家族の普段の生活についてでは、〈現在の親子関係〉をはかる質問項目として、立木茂雄研究室で開発が進められてきた家族システム評価尺度 FACESKG (Family Adaptability and Cohesion Evaluation Scale at Kwansei Gakuin)を使用する。質問項目は最新の「FACESKGIV-16 (Version 3) 2009年6月2日」を使用し、質問紙を作成している。

# (1) 家族システム評価尺度 FACESKG

FACESKG は、デイビッド・H・オルソン (David H. Olson) の円環モデル (Circumplex Model of Marital and Family Systems) に基づく家族システム評価尺度である。しかし、オルソンらの FACES シリーズの翻訳版ではない。日本の社会や文化に適合させるために、オリジナルに項目 (Original items adaptive to Japanese Families) を作成し、実証的な項目分析を経て作り上げたものである(立木 1999)。

今回の調査で使用された FACESKGIV-16 (Version 3) 2009 年 6 月 2 日の概念、水準、尺度値は以下の通りである。

表 1: FACESKGIV-16(Version 3) 2009 年 6 月 2 日

AX 1 . FACEBRATY TO(VEISION 5)		1	
項目	概念	水準	尺度値
問題が起こると家族みんなで話し合い、決まっ	かじとり	柔軟	0.5
たことはみんなの同意を得たことである	W, C C 9	****\	0.0
家でのそれぞれの役割ははっきりしているが、	かじとり	きっちり	-0.5
皆でおぎないあうこともある	N-029	2000	-0.5
困ったことが起こったとき、いつも勝手に決断	かじとり	融通なし	-3.5
を下す人がいる	かしこり	際地なし	-5.0
わが家ではそれぞれの家での役割を気軽に交	かじとり	柔軟	1 5
代することができる	かしこり	<b>米</b> 駅	1.5
家の決まりは皆が守るようにしている	かじとり	きっちり	-1.5
わが家はみんなで約束したことでもそれを実	かじとり	てんやわ	2.5
行することはほとんどない	かしこり	んや	2.5
問題が起こると家族で話し合いがあるが、物事			
の最終決定はいつも決まった人の意見がとお	かじとり	融通なし	-2.5
<b>3</b>			
わが家では家族で何か決めても、守られたため	かじとり	てんやわ	3.5
しがない	かしとり	んや	5.0
たいがい各自好きなように過ごしているが、た	きずな	サラリ	0.5
まには家族一緒に過ごすこともある	294	9 / 9	-0.5
わが家では、子どもが落ち込んでいる時は親も	きずな	サラリ	1 5
心配するが、あまり聞いたりしない	294	9 / 9	-1.5
悩みを家族に相談することがある	きずな	ピッタリ	1.5
家族はお互いの体によくふれあう	きずな	ベッタリ	3.5
家族の間で、用事以外の関係は全くない	きずな	バラバラ	-3.5
家族のものは必要最低限のことは話すが、それ	セギか	125 125	0.5
以上はあまり会話がない	きずな	バラバラ	-2.5
休日は家族で過ごすこともあるし、友人と遊び	セギム	ा	0.5
に行くこともある	きずな	ピッタリ	0.5

誰かの帰りが遅い時には、その人が帰るまでみ	キヂゎ	ベッタリ	0.5
んな起きて待っている	294	* * * * * * * * * * * * * * * * * * * *	2.0

「出典: 立木, 2009」

#### (2) カッティングポイント

FACESKGIV はすべてサーストン尺度のために、各項目には、きずな・かじとりの各次元を最低から最高まで 8 水準(FACESKGIV-8 では 4 水準)に分割し、それぞれの水準に対応させた尺度値が付与されている。従って、カッティングポイントは尺度値の合計として理論的に求められる。たとえば、FACESKGIV-16 の場合、きずなでは、「バラバラ」(-2 未満)、「サラリ」(-2 以上、0 未満)、「ピッタリ」(0 以上、2 以下)、「ベッタリ」(2 を越える得点)となる。かじとりも同様に、「融通なし」(-2 未満)、「キッチリ」(-2 以上、0 未満)、「柔軟」(0 以上、2 以下)、「てんやわんや」(2 を越える得点)となる(立木 1999)。

# 2.3.4 なりたい親と思春期・現在の親子関係との関係性

櫻井・本多(2004)の分析手法は、「どのような親になりたいか」と「思春期の頃の母親との関係に関する認識」との相関関係を調べるため、「どのような親になりたいか」と「思春期のころの母親との関係に関する認識」の各下位尺度得点の相関関数を示している。今回の分析では、「どのような親になりたいか」に対して〈思春期の頃の母親・父親との関係に関する認識〉・〈現在の親子関係〉がどのような影響を及ぼしているかという関係性を調べるため、相関関係だけではなく、従属変数に〈なりたい親因子〉、独立変数に〈父親因子〉〈母親因子〉〈きずな〉〈かじとり〉を入れて、合計 32 回の重回帰分析を用いて、変数間の関係性の分析を行った。

#### 3. 調査結果および分析

#### 3.1 思春期の親子関係について

「『なりたい親』におよぼす思春期の親子関係の影響」(櫻井・本多 2004)では、「思春期のころの母親との関係に関する認識についての質問紙において、30項目からなる質問について因子分析をした結果、4つの因子が抽出された。この4因子は久保田の結果とほぼ一致しているが、各因子を構成する質問項目は異なっている」(68)と述べられているが、今回SPSSを使用して分析を行った結果、ここで述べられている因子とは違う新たな因子が抽出された。

#### (1) 母親因子

表 2: 母親との関係因子分析結果(因子固定なし)

	敬愛	拒否•侮蔑	依存	先行研究
3) 自分に向けられる母親の愛を感じるように	0. 831	0. 066	0. 107	_
なった				敬愛
5) 母親への感謝の念がおこった	0. 827	-0. 038	0. 091	敬愛

2) 母親を尊敬するようになった	0. 789	-0. 184	0. 136	敬愛
12) 母親の存在がうすくなった	-0. 52	0. 159	-0. 031	侮蔑
4) 母親がうっとうしくなった	-0. 225	0. 776	-0. 198	拒否
6) 母親の愛情を素直にうけとめられなかった	-0. 079	0. 684	-0. 151	拒否
9) 母親はいつまでも私を子ども扱いしていた	-0. 026	0. 619	0. 248	侮蔑
8) 母親に支配されていた	-0. 279	0. 606	0. 381	侮蔑
1) 母親を嫌うようになった	-0. 409	0. 604	-0. 203	拒否
7) 母親は私の機嫌をうかがっていた	0. 124	0. 532	0. 124	依存
10) 母親のいうことをきいていれば間違いない	0.068	0. 023	0. 835	
と思った				依存
11) 母親の期待にこたえようと努力した	0. 247	0. 002	0. 7	依存

[1] ①思春期の頃(中学 2~3年の頃)の母親との関係の認識についての質問から抽出された因子である〈母親因子〉は、「自分に向けられる母親の愛を感じるようになった」、「母親への感謝の念がおこった」、「母親を尊敬するようになった」の質問から成る〈敬愛〉因子、「母親の存在がうすくなった」、「母親がうっとうしくなった」、「母親の愛情を素直にうけとめられなかった」、「母親はいつまでも私を子ども扱いしていた」、「母親に支配されていた」、「母親を嫌うようになった」、「母親は私の機嫌をうかがっていた」の質問から成る〈拒否・侮蔑〉因子、「母親のいうことをきいていれば間違いないと思っていた」、「母親の期待にこたえようと努力した」の質問から成る〈依存〉因子の3種類である。

# (2) 父親因子

表 3: 父親との関係因子分析結果(因子固定なし)

	敬愛·依存	拒否	侮蔑	先行研究
2) 父親を尊敬するようになった	0. 873	-0. 158	-0.066	敬愛
5) 父親への感謝の念がおこった	0. 846	-0. 014	-0.046	敬愛
3) 自分に向けられる父親の愛を感じるように	0. 817	-0. 003	-0. 138	
なった				敬愛
10) 父親のいうことをきいていれば間違いない	0. 628	-0. 134	0.43	
と思った				依存
11)父親の期待にこたえようと努力した	0. 565	-0. 163	0. 327	依存
6) 父親の愛情を素直にうけとめられなかった	-0. 051	0. 735	0. 217	拒否
4) 父親がうっとうしくなった	-0. 293	0. 698	0. 315	拒否
7) 父親は私の機嫌をうかがっていた	0. 168	0. 667	0. 107	依存
1) 父親を嫌うようになった	-0. 501	0. 66	0. 252	拒否
12) 父親の存在がうすくなった	-0.196	0. 619	-0. 285	侮蔑
8) 父親に支配されていた	0.034	0. 129	0. 797	侮蔑
9) 父親はいつまでも私を子ども扱いしていた	-0.068	0. 269	0. 654	侮蔑

[1] ②思春期の頃(中学 2~3 年の頃)の父親との関係の認識についての質問から抽出された因子である〈父親因子〉は、「父親を尊敬するようになった」、「父親への感謝の念がおこった」、「自分に向けられる父親の愛を感じるようになった」、「父親の言うことをきいていれば間違いないと思った」、「父親の期待にこたえようと努力した」の質問から成る〈敬愛・依存〉因子、「父親の愛情を素直にうけとめられなかった」、「父親がうっとうしくなった」「父親は私の機嫌をうかがっていた」「父親を嫌うようになった」、「父親の存在がうすくなった」の質問から成る〈拒否〉因子、「父親に支配されていた」、「父親はいつまでも私を子ども扱いしていた」の質問から成る〈侮蔑〉因子の3種類である。

#### 3.2 将来自分がなりたい親のイメージについて

#### (1) なりたい親因子

櫻井・本多(2004)は、「どのような親になりたいか」についての40項目からなる質問について因子分析をした結果、「支配」「寛容」「放任」「溺愛」の4つの因子が抽出された、と述べられている。しかし、今回改めてSPSSで分析をした結果、この記述とは違う因子が抽出された。

表 4: なりたい親因子分析結果(因子固定なし)

	寛容	支配	溺愛	放任	先行研究
8) 子どもの心を大切にしたい	0. 853	0. 114	0. 128	0. 061	寛容
12) 子どもの考えをきちんと聞いてあげたい	0. 821	0. 234	0. 085	0. 019	寛容
6) 子どもの人格を認めてあげたい	0. 784	0. 029	0. 16	0. 157	寛容
7) 仕事も子育ても両立したい	0. 494	0. 238	-0.46	0. 178	放任
10) 子どもが自慢したくなるような親であり	0. 322	0. 795	-0.064	0.066	<del></del> ===
たい					支配
9) 子どもから尊敬され、目標にされたい	0. 352	0. 789	-0. 119	-0. 046	支配
11) 親の言うことを素直に聞く子どもに育て	-0. 217	0. 698	0. 185	0. 052	<del></del> ===
たい					支配
1)子どもを包み込んであげたい	0. 246	0. 488	0. 477	0. 225	溺愛
5) 家にいて子どもの帰りを待ちたい	0. 11	0. 014	0. 776	0. 039	放任
2) 自分の時間を削っても子どもにつくした	0. 18	0. 465	0. 492	-0. 275	湿惑
()					溺愛
4) 子どもに不自由ない豊かな生活をさせて	0.068	0. 043	-0. 098	0. 889	+ <i>h</i> /T
あげるためにも共働きをしていきたい					放任
3) 子どもは誉めて育てたい	0. 29	0. 015	0. 403	0. 507	溺愛

今回の分析では、[2]「将来自分がなりたい親のイメージ」についての質問から抽出された因子である〈なりたい親因子〉は、「子どもの心大切にしたい」、「子どもの考えをきちんと聞いてあげたい」、「子どもの人格を認めてあげたい」、「仕事も子育ても両立したい」

の質問から成る〈寛容〉因子、「子どもが自慢したくなるような親でありたい」、「子どもから尊敬され、目標にされたい」、「親の言うことを素直に聞く子どもに育てたい」、「子どもを包み込んであげたい」の質問から成る〈支配〉因子、「家にいて子どもの帰りを待ちたい」、「自分の時間を削っても子どもにつくしたい」の質問から成る〈溺愛〉因子、「子どもに不自由ない豊かな生活をさせてあげるためにも共働きをしていきたい」、「子どもは誉めて育てたい」の質問から成る〈放任〉因子の4種類から構成されている。

この最後の〈放任〉因子は、先行研究で前述した『社会心理学事典』(日本社会心理学会 2009)の「親子関係」で述べられている「養育態度のスタイル」である「権威ある」「権威主義的」「甘やかし」「放任」の4タイプを参考とした。

#### (2) なりたい親のイメージの要因

「『なりたい親』におよぼす思春期の親子関係の影響」(櫻井・本多 2004)では、「どのような親になりたいか」の質問紙で、なりたいと思う親のイメージが形成された要因を自由に記述してもらった結果、良好な母子関係であったと認識していた人は、自分の親のようになりたいと思っていた。反対に、母子関係が良好でなかったと認識していた人は、自分が嫌だと感じていたことは子どもにはさせたくないと思い、自分の親を反面教師にし、自分の親のようにはなりたくないと思っていた。マスメディアなどから影響されたという記述も多く見られたが、自分の親との比較によって自分の親子関係にないものに憧れ、うらやましいと思ったとすると、やはり自分の親が親としての基準となっていると考えられる、という結論に至っている。

今回の調査でも、回答した大半の学生が「自分の親」を基本に「なりたい親のイメージ」 を考えている傾向にあるということがわかった。

回答に「自分の親」「自分の両親」「自分の親のイメージ」という記述が多く見られたことから、自分の親がモデルになっているという認識をしている大学生が多く、「自分の両親が私を育ててくれた育て方が、私の今の理想の子育ての方法を形成していると思う。」や「自分の親の、自分に対する接し方。自分の尊敬する大人。自分が子どもの頃に感じていたこと。」という核心をつく意見もあった。

「母と父が育ててくれたように自分も自分の子どもに接したい。」と、素直に自分の親のようになりたいと思う意見は多かった。「共働きで働きながらも、きちんと家事もこなしていた母の姿」、「自分の父親が子どもにあまり干渉しないタイプで、それがよかったと思うから。」「放任的だが自分を愛してくれた親によって」といった具体的な姿を挙げる人もおり、頭にあるイメージが明確な例もあった。

「自分の親と比較して、反面教師とする部分がなりたいと思う親のイメージとなった。もちろん良い所はそのまま見習いたい。」といった親の悪いところを反面教師として理想の親像に反映させるという意見も多く見られた。中には「現在の母親の正反対の姿。」「今まで見てきた母親の態度(このような親にはなりたくないと思った)」といった厳しい意見もあった。「母が過保護だったので、自分は子どもに自立を促したい」、「親に~しろって言われるのがものすごく嫌だった。」などのように、変えたいところを明確にイメージしている意見も見られた。

「自分が子どものころの親に持っていたイメージ」といった過去のイメージを要因だと

考える人もいれば、「今の親のイメージ。怒るときはしっかりと怒り、共に笑う時は笑ってくれる親であったので、「そうなりたい」といつからか思うようになった」といった「現在の親のイメージ」がそのままなりたい親のイメージにつながるという意見もあった。

「母親が私にしてくれたことを受け継ぎたいと思ったから」という意見もあり、親をモデルにするという考えとは違う見方もあった。また「自由奔放に生きている親(自分のしたいことを他人の目や環境にとらわれずにできる)」といった子どもに対してどう接していくかよりも親の生き方について重視している意見もあり、「親の影響」と一言では言い表せないということがわかる。

「海外での移住の経験」など、過去の経験が基になっていると考える意見もあった。また、櫻井・本多の調査時と同様に、テレビや雑誌・小説などメディアの影響だと考えている人もいた。

しかし中には「今の家庭環境や大学で出会った友達の家の状況などをきいて」「普段の両親との生活」といった、現在の家族関係との関連をにおわせる記述も見受けられた。「学校・塾の先生」「大学の友人・知人の影響」といった成長過程で出会った家族以外の人からの影響を受けたと考える意見も見られた。

#### 3.3 現在の親子関係について

〈きずな〉・〈かじとり〉の測定不能な回答は、無回答の9を入力して計算した。その後、2.2.3 の研究手法を用いて、カッティングポイントの得点化をし、〈きずな〉と〈かじとり〉の因子を作成した。

#### 3.4 関係性——重回帰分析

重回帰分析を用いて変数間の関係性の分析を行った結果、信頼できる尺度として有意確率が 0.05 以下の結果が、以下のものである。

表 5: 寛容に与える母親・敬愛の結果 分散分析 b

モデル		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
		(分散成分)				
1	回帰	10. 799	1	10. 799	11. 201	. 001
	残差(分散分析)	263. 201	273	. 964		
	合計 (ピボット テーブル)	274. 000	274			

a. 予測値: (定数)、母親・敬愛。

b. 従属変数 寛容

#### 係数a

モデル	標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
	В	標準誤差	ベータ		

1	(定数)	. 000	. 059		. 000	1. 000	
	母親・敬愛	. 199	. 059	. 199	3. 347	. 001	

#### a. 従属変数 寛容

「将来自分がなりたい親のイメージ」の質問項目から抽出された、なりたい親因子の〈寛容〉と、「思春期の頃の母親との関係の認識について」の質問項目から抽出された、母親因子の〈敬愛〉の分散分析の結果は、平方和が10.799、自由度が1、F値が11.201、ベータ係数が0.199、有意確率が0.001であった。よって、なりたい親因子の〈寛容〉に対して、母親因子の〈敬愛〉による影響がみられた。

表 6: 支配に与える母親・敬愛の結果

#### 分散分析 b

モデル		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
		(分散成分)				
1	回帰	12. 760	1	12. 760	13. 334	. 000
	残差(分散分析)	261. 240	273	. 957		
	合計 (ピボット テーブル)	274. 000	274			

a. 予測値: (定数)、母親・敬愛。

b. 従属変数 支配

#### 係数a

モデル		標準化されていない係数		標準化係数	t 値	有意確率
		В	標準誤差	ベータ		
1	(定数)	. 000	. 059		. 000	1. 000
	母親・敬愛	. 216	. 059	. 216	3. 652	. 000

# a. 従属変数 支配

なりたい親因子の〈支配〉と、「思春期の頃の母親との関係の認識について」の母親因子の〈敬愛〉の分散分析の結果は、平方和が12.76、自由度が1、F値が13.334、ベータ係数が0.216、有意確率が0であった。よって、なりたい親因子の〈支配〉に対して、母親因子の〈敬愛〉による影響がみられた。

表7:支配に与える母親・依存の結果

#### 分散分析 b

モデ	ル	平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
		(分散成分)				
1	回帰	6. 839	1	6. 839	6. 989	. 009
	残差(分散分析)	267. 161	273	. 979		

合計 (ピボット	274. 000	274		
テーブル)				

- a. 予測値: (定数)、母親・依存。
- b. 従属変数 支配

#### 係数a

モデル	モデル		ていない係数	標準化係数	t 値	有意確率
		В	B 標準誤差			
1	(定数)	. 000	. 060		. 000	1. 000
	母親・依存	. 158	. 060	. 158	2. 644	. 009

#### a. 従属変数 支配

なりたい親因子の〈支配〉と、「思春期の頃の母親との関係の認識について」の母親因子の〈依存〉の分散分析の結果は、平方和が 6.839、自由度が 1、F 値が 6.989、ベータ係数が 0.158、有意確率が 0.009 であった。よって、なりたい親因子の〈支配〉に対して、母親因子の〈依存〉による影響がみられた。

表8: 溺愛に与える母親・依存の結果

#### 分散分析 b

		平方和				
モデル		(分散成分)	自由度	平均平方	F 値	有意確率
	回帰	5. 765	1	5. 765	5. 867	. 016
	残差(分散分析)	268. 235	273	. 983		
	合計(ピボット テーブル)	274. 000	274			

- a. 予測値: (定数)、母親・依存。
- b. 従属変数 溺愛

#### 係数a

		標準化されていない係数		標準化係数		
モデル		В	標準誤差	ベータ	t 値	有意確率
1	(定数)	. 000	. 060		. 000	1. 000
	母親・依存	. 145	. 060	. 145	2. 422	. 016

# a. 従属変数 溺愛

なりたい親因子の〈溺愛〉と、「思春期の頃の母親との関係の認識について」の母親因子の〈依存〉の分散分析の結果は、平方和が5.765、自由度が1、F値が5.867、ベータ係数が0.145、有意確率が0.016であった。よって、なりたい親因子の〈溺愛〉に対して、母親因子の〈依存〉による影響がみられた。

表 9: 支配に与える父親・敬愛、依存の結果

分散分析 b

		平方和				
モデ	ル	(分散成分)	自由度	平均平方	F 値	有意確率
1	回帰	24. 923	1	24. 923	27. 316	. 000
	残差(分散分析)	249. 077	273	. 912		
	合計(ピボット テーブル)	274. 000	274			

a. 予測値: (定数)、父親・敬愛、依存。

b. 従属変数 支配

係数a

	標準化されていない係数		標準化係数		
モデル	В	標準誤差	ベータ	t 値	有意確率
1 (定数)	. 000	. 058		. 000	1. 000
父親・敬愛、依存	. 305	. 058	. 302	5. 226	. 000

#### a. 従属変数 支配

「将来自分がなりたい親のイメージ」の質問項目から抽出された、なりたい親因子の〈支配〉と、「思春期の頃の母親との関係の認識について」の質問項目から抽出された、父親因子の〈敬愛・依存〉の分散分析の結果は、平方和が24.923、自由度が1、F値が27.316、ベータ係数が0.302、有意確率が0であった。よって、なりたい親因子の〈支配〉に対して、父親因子の〈敬愛・依存〉による影響がみられた。

表 10: 溺愛に与える父親・敬愛、依存の結果 分散分析 b

		平方和				
モデル		(分散成分)	自由度	平均平方	F 値	有意確率
1	回帰	5. 953	1	5. 953	6. 064	. 014
	残差(分散分析)	268. 047	273	. 982		
	合計(ピボット テーブル)	274. 000	274			

a. 予測値: (定数)、父親・敬愛、依存。

b. 従属変数 溺愛

係数a

	標準化されていない係数		標準化係数		
モデル	В	標準誤差	ベータ	t 値	有意確率
1 (定数)	. 000	. 060		. 000	1. 000

父親・敬愛、依存	. 149	. 061	. 147	2. 462	. 014

#### a. 従属変数 溺愛

「将来自分がなりたい親のイメージ」の質問項目から抽出された、なりたい親因子の〈溺愛〉と、「思春期の頃の母親との関係の認識について」の父親因子の〈敬愛・依存〉の分散分析の結果は、平方和が 5.953、自由度が 1、F 値が 6.064、ベータ係数が 0.147、有意確率が 0.014 であった。よって、なりたい親因子の〈溺愛〉に対して、父親因子の〈敬愛・依存〉による影響がみられた。

表 11: 溺愛に与える父親・拒否の結果 分散分析 b

		平方和				
モデ	・ル	(分散成分)	自由度	平均平方	F 値	有意確率
1	回帰	3. 561	1	3. 561	3. 595	. 059
	残差(分散分析)	270. 439	273	. 991		
	合計(ピボット テーブル)	274. 000	274			

a. 予測値: (定数)、父親・拒否。

b. 従属変数 溺愛

係数a

		標準化されていない係		標準化係数		
モデル		В	標準誤差	ベータ	t 値	有意確率
1	(定数)	. 000	. 060		. 000	1. 000
	父親・拒否	. 115	. 061	. 114	1. 896	. 059

# a. 従属変数 溺愛

なりたい親因子の〈溺愛〉と、「思春期の頃の母親との関係の認識について」の父親因子の〈拒否〉の分散分析の結果は、平方和が3.561、自由度が1、F値が3.595、ベータ係数が0.114、有意確率が0.059であった。よって、なりたい親因子の〈溺愛〉に対して、父親因子の〈拒否〉による影響がみられた。

表 12: 溺愛に与えるきずなの結果

		_			
被	鯩	者	먥	田	7

		値ラベル	N
きずな尺度	1. 00	バラバラ	43
	2. 00	サラリ	34
	3. 00	ピッタリ	118
	4. 00	ベッタリ	80

#### 被験者間効果の検定

従属変数:溺愛

	タイプ				
ソース	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	13. 356	3	4. 452	4. 629	. 004
切片	1. 706	1	1. 706	1. 774	. 184
きずな尺度	13. 356	3	4. 452	4. 629	. 004
誤差	260. 644	271	. 962		
総和	274. 000	275			
修正総和	274. 000	274			

溺愛 の推定周辺平均

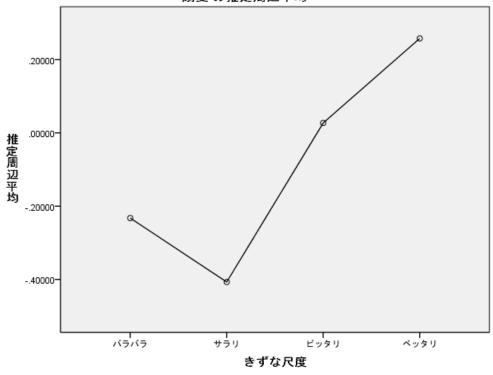


図2: 溺愛の推定周辺平均

なりたい親因子の〈溺愛〉と、「現在の親子関係」をはかる家族システム評価尺度 FACESKG を使用した「家族の普段の生活について」の質問項目から抽出された、〈きずな〉の分散分析の結果は、平方和が 13.356、自由度が 3、F 値が 4.629、有意確率が 0.004 であった。よって、なりたい親因子の〈溺愛〉に対して、現在の家族関係の因子である〈きずな〉による影響がみられた。

櫻井・本多の分析結果と今回の結果と比較したものを以下にまとめる。櫻井・本多(2004)

の分析結果は、「どのような親になりたいか」の「支配」は、「思春期のころの母親との関係に関する認識」の「依存」と 1%水準の正の相関が見られた。また、「どのような親になりたいか」の「寛容」は「思春期のころの母親との関係に関する認識」の「依存」と 5%水準の負の相関が見られた。「どのような親になりたいか」の質問紙で抽出された因子間の相関関係は、「支配」と「溺愛」との間には、1%水準の正の相関が見られ、「支配」と「寛容」との間には、1%水準の負の相関が見られた。「寛容」と「溺愛」との間には、5%水準の正の相関が見られた。「思春期のころの母親との関係に関する認識」の質問紙で抽出された因子間の相関関係としては、「拒否」と「侮蔑」の間には 1%水準の正の相関が見られ、「拒否」と「敬愛」と「依存」との間には 5%水準の正の相関が見られた。

今回の分析では、父親因子の〈敬愛・依存〉は、なりたい親因子の〈支配〉と〈溺愛〉に対して正の影響がみられ、父親因子の〈拒否〉は、なりたい親因子の〈溺愛〉に対して正の影響がみられた。母親因子の〈敬愛〉は、なりたい親因子の〈寛容〉と〈支配〉に対して正の影響がみられ、母親因子の〈拒否・侮蔑〉は、なりたい親因子の〈寛容〉に対して正の影響がみられ、母親因子の〈依存〉は、なりたい親因子の〈支配〉と〈溺愛〉に対して正の影響がみられた。きずな因子は、なりたい親因子の〈溺愛〉に対して正の影響がみられたが、かじとり因子となりたい親因子の関係は今回の結果からは認められなかった。

#### 3.5 考察

今回の調査から、思春期のころの父親・母親との関係は多かれ少なかれなりたい親に影響を及ぼしていることが示された。父親因子の〈敬愛・依存〉は、なりたい親因子の〈支配〉と〈溺愛〉に対して影響がみられたという結果から、思春期の頃に父親に対して尊敬や感謝の念を感じ、「父親のいうことをきいていれば間違いないと思った」などの質問項目のように父親を慕っていた人ほど、自分が親になったときも子どもを支配したいと思わせる。櫻井・本多(2004)が述べた「母親に依存し、母親の支配下で行動していれば間違いないと思っていた親子関係が、自分が将来親になったときに、子どもの上位に立ち子どもを支配するような親になりたいと思わせる。」(71)という考察にあてはまると言える。また、自分が親の立場になった時も、「自分に向けられる父親の愛を感じるようになった」などの質問項目のように、自分が思春期の頃に受けたような愛情を注ぎたい、という考えから、子どもを溺愛する傾向にある。

父親因子の〈拒否〉は、なりたい親因子の〈溺愛〉に対して影響がみられたという結果から、思春期の頃に「父親を嫌うようになった」や「父親の愛情を素直にうけとめられなかった」などの質問項目のように自分の父親を拒否し、良い関係が作れなかったことを反面教師として、自分が親になったときは子どもを可愛がってやろうとすることによって、子どもを溺愛するようになる。

母親因子の〈溺愛〉は、なりたい親因子の〈寛容〉と〈支配〉に対して影響がみられたという結果から、母親に対して感謝や尊敬の念を感じ、「自分に向けられる愛を感じるようになった」などの質問項目のように愛情を感じていた人は、「子どもの心を大切にしたい」や「子どもの考えをきちんと聞いてあげたい」と考える〈寛容〉な親タイプと、「子どもが自慢したくなるような親でありたい」や「親の言うことを素直に聞く子どもに育てたい」

と考える〈支配〉的な親タイプのどちらにもなりうる傾向がある。これは、極端ではないが子どもに対する愛情が強すぎると〈支配〉になってしまう恐れがあるということである。 ただし、支配されていると自身が感じていなければ、〈敬愛〉の意を母親に示していても自覚していない〈支配〉タイプになりうる可能性がある。

母親因子の〈依存〉は、なりたい親因子の〈支配〉と〈溺愛〉に対して影響がみられたという結果から、思春期の頃、「母親の期待にこたえようと努力した」などの質問項目のように母親に依存していた場合、自分もしっかり子どもをみてあげなくてはいけない、という思いから子どもの行動を支配し、依存させてくれた母親のように子どもを愛そうとする思いが強いということが考えられる。

〈きずな〉因子は、なりたい親因子の〈溺愛〉に対して影響がみられたという結果から、 現在の親子関係が〈ベッタリ〉であるほど、自分がなりたい親も子どもを溺愛するタイプ になるという傾向にあるという結果が示された。

#### おわりに

本研究において、2011年の時点で同志社大学に在籍している学生を対象に調査を実施した。その結果、思春期の親子関係は、なりたい親の理想像に影響している部分が見られた、と言えるだろう。しかし、今回社会学的な調査を実施するにあたって、桜井・本多の質問紙の尺度の質は分析の結果、有意確率が低かった。よって、正確な尺度とは言えない、ということが本研究で明らかになった。

ただ、自由記述のところに「自分の父親。大人になって、初めて父の大きさを知った。ただ、結婚はしません。」といった記述があった。これは自己成長によって思春期の頃には気づかなかった親への尊敬を認めたものの、結婚については否定的な意見である。例え認識の変化があっても、一定の結果は得られないということが分かった。具体的には「今になって母や父の言っていたことがわかるようになり、甘やかすだけでは愛情ではないと思ったから、親のように少しなりたい」や「思春期には反抗していましたが、自分の親は尊敬していて、育て方も良いと思っているので、親の影響は大きいです。」という見方が変わったという意見である。子どもの頃の親に対して、あの頃の親のようになりたいという思いが芽生えている。そのため、自身の成長の結果、現在の親子関係が良好になり、「なりたい親のイメージ」に影響した、とまではいえなかった。しかし分析での結果は得られなかったものの、「親と中1の頃から離れているため、自分の心をわかってほしいとよく思ったから。」というように、離れていても〈自分の親〉は〈なりたい親〉に影響するという可能性を示すことができた。

今回の調査では、現在の親子関係と将来なりたい親の関係は、家族間の関係のつながりが〈ベッタリ〉であるほど、子どもを溺愛したいと考える傾向が認められたが、それ以外の有意な関係は認められなかった。ここから、大学生の時点での家族関係は、思春期から現時点までに身につけた価値観で、大人になればなるほど良好な関係にもっていく意志をもつことができる。しかし、〈なりたい親〉は自分の欲望であるため、やはり思春期の頃の親子関係の方が影響を及ぼしている可能性が高い、といえる。

# 【参考文献】

D.ミッチェル編・下田直春監訳, 1987『新社会学辞典』新泉社.

自由国民社編,2011『現代用語の基礎知識 2011年版』

久保田まり、1995『アタッチメントの研究 内的ワーキング・モデルの形成と発達』 川島書店.

目黒依子, 2007『家族社会学のパラダイム Social Network Life course Gender』勁 草書房.

日本社会学会・社会学事典刊行委員会編,2010『社会学事典』丸善.

日本社会心理学会編,2009『社会心理学事典』丸善.

大橋正夫・長田雅喜, 1987 『対人関係の心理学』有斐閣大学双書.

櫻井登世子・本多潤子, 2004,「「なりたい親」におよぼす思春期の親子関係の影響」『人間福祉研究』第7号:65-76

立木茂雄, 1999, 『家族システムの理論的・実証的研究 オルソンの円環モデル妥当性の 検証』川島書店.

# 【参考 URL】

デジタル大辞泉, 2011, ジャパンナレッジ オンラインデータベース, (2011 年 12 月 7 日 取得, http://www.jkn21.com)

JR東日本, 2011, 「きっぷに関するご案内」, JR東日本ウェブサイト, (2011年 11月

- 10 日取得, http://www.jreast.co.jp/kippu/06.html)
- ネットでお小遣いのすすめ、2011、「WMC (ワーナー・マイカル・シネマズ) で映画をお得に観る方法」、ネットでお小遣いのすすめ、(2011 年 12 月 12 日取得、http://tibikorokunn.ojiji.net/index38.html)
- 立木茂雄, 1999「夫婦・家族システムの円環モデル:基本的概念枠組み」,『家族社会学の分析視覚家族システム論的アプローチ』, (2011 年 12 月 19 日取得, http://tatsuki-lab.doshisha.ac.jp/~statsuki/papers/FamilySociology/FamilySystemPaper. PDF)
- 立木茂雄, 1999「円環モデル仮説と実証研究」,『家族社会学の分析視覚家族システム論的アプローチ』,(2011 年 12 月 19 日取得, http://tatsuki-lab.doshisha.ac.jp/~statsuki/papers/FamilySociology/FamilySystemPaper.PDF)
- 立木茂雄,「FACESKG Page」,立木茂雄研究室,(2011 年 10 月 25 日取得, http://tatsuki-lab.doshisha.ac.jp/~statsuki/FACESKG/FACESindex.html)
- 立木茂雄, 2009「FACESKGIV-16(Version 3)2009 年 6 月 2 日」, 立木茂雄研究室, (2011 年 10 月 30 日 取 得, http://tatsuki-lab.doshisha.ac.jp/~statsuki/FACESKG/FACESKGIV16 (Version3).htm)